The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	台湾の民芸と柳宗悦
Author(s)	林, 承緯
Citation	デザイン理論. 2006, 49, p. 63-73
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53003
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

台湾の民芸と柳宗悦

林　承緯
大阪大学大学院（博士後期課程）

キーワード
柳宗悦，民芸運動，台湾民芸，地方性
YANAGI Muneyoshi, Mingei Movement
Taiwan Folk Crafts, Local Colour

はじめに
1．台湾民芸との出会い
　1－1　柳宗悦の訪台
　1－2　台湾民芸紀行
2．美の発見
　2－1　漢民族の竹細工
　2－2　高砂族（原住民族）の織物
3．地方性と東アジアの造形文化
　3－1　東アジアの造形文化と台湾民芸の美
　3－2　地方性と時代について
おわりに

はじめに

日本の民芸運動の指導者柳宗悦と日本の南西に位置する島国台湾。どのような縁で，一見関連性のないこの二つが交わっているのだろうか。一方，このめぐり合わせの結果，双方にどのような影響と衝撃がもたらされたのだろうか[1]。

「たとへば焼物を例にとりますと，実に台湾には焼物は何も無いと聞かされ，さうであらうかと想像して来たのですが，来て見てその盛んなことに驚いた。」

柳宗悦「台湾の民藝を語る」『民藝』148号

以上は柳宗悦が台湾を訪ねたとき，台湾民芸について語った言葉である。1943年（昭和18）3月，柳の一行は台湾北部の基隆から上陸し，1ケ月の時間をかけて台湾全島の民間生活用具について広範な調査活動をおこなった。この活動中，柳は台湾において生産された各種の民芸品に注目し詳細に観察したところ，予想外の発見に出会うことになった。台湾の民芸に以前から理想としていた民芸美を見い出し，また台湾の民芸が生み出す美しさを発見した。思わぬ収穫を得た喜びを，柳はこの調査活動中の言行に度々現わしている。さらに調査の行程を終えたのち，その将来的な発展に関して多くの提案を述べた。

「台湾はいろいろな面において東亜各地の要素が輻輳しているところだときいてゐますが，将来東亜の造形文化の発展のうへにおいて一つの基地とならねばならない。将来立派な使命のあるところだと思ふ。」

柳宗悦「台湾の民藝を語る」『民藝』148号

本研究は柳と台湾民芸を考察の中心とし，当時の文献の分析と論述を通じてこの課題を深く掘り下げる。先行研究について述べるならば，国内外において柳宗悦と民芸運動に関する研究は多い。また，柳と日本の周辺地域，つまり琉球（沖縄）と朝鮮における民芸文化についての研究はかなり見られる。しかし，柳と台湾，アイヌ，満州，中国の民芸に関する研究は僅かである。台湾の学術界において柳についての研究成果を見てみると，江韶瑩氏の研究[2]のほかは全く見当たらない。この研究は柳の訪台時の考察過程と彼の台湾民芸についての論述の分析を通して台湾民芸のもつ美感と文化的価値を再確認し，今後の台湾民芸と民間造形文化研究の土台を築くことを目的としたものである。

1．台湾民芸との出会い

1－1　柳宗悦の訪台

台湾はユーラシア大陸と太平洋の間に位置している。北は日本の南西諸島に近接し，西は台湾海峡を隔てて中国大陸を望み，海洋文化と大陸文化が交差する亜熱帯の島国である。歴史発展的過程を見てみると，日本統治期の台湾の工芸は基本的に南島語族の原住民文化や清国統治期に台湾に入って来た漢民族文化，日本統治期の日本文化が融合したものである。台湾の原住民族は日本統治期には高砂族と呼ばれ，鳥居龍蔵が確立した分類方式によると，タイヤル，サイシャット，サオ，ブヌン，アミ，パイワン，ルカイ，プユマ，ヤミの９つの民族に細かく分けることができる。これらの民族はそれぞれ異なる言語や，文化，社会組織をもつ。芸術表現においては特に造船（図１）や紡織，彫刻，陶器，刺繍などが際立っている。また，明清の時代に台湾に入った漢民族は中国の東南沿岸地域の文化と芸術表現を持ち込み，芸術表現において陶器や木彫，刺繍に長けていた。19世紀末から台湾を領有した日本は51年間の統治期に教育や文化交流を通して日本の伝統文化と芸術の要素を伝えた。また，殖産興業の政策上，台湾の手工業育成を教化し，とりわけ草帽や竹細工，

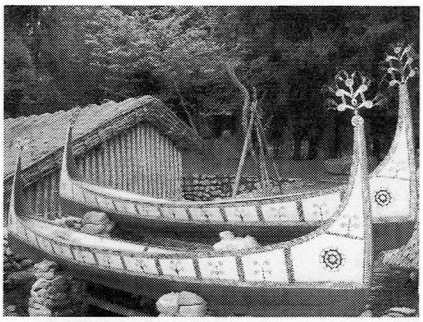

図１　原住民族（ヤミ族）の船，
（筆者撮影，2005，台湾南投）

陶器，漆器などの分野に力を入れた。

柳は1943年（昭和18）３月９日～４月21日の間[3]，東洋美術国際研究会と日本民芸館の依託を受け，台湾の生活用具の調査活動を行った。当時は戦争がもっとも激しく繰り広げられた時期で，米軍は台日間を航行する船をしばしば爆撃していた。柳自分もこの渡航の危険性を承知していたが，台湾への調査を断行した。約１ケ月の滞在期間中，柳の活動は当時台湾に居住していた金関丈夫や宮本延人，立石鉄臣らの協力の下に展開された。この調査の目的は，「台湾には，原住民と本島人（漢民族）の二つの系統の文化がある。私はこの両類の工芸品，生産組織，手法，材料，系統などを調査した[4]。」と柳は語った。

柳宗悦の一行は台湾の最北端の都市基隆を出発し，台北（淡水，板橋），鶯歌，新竹，台中（霧峰），彰化，鹿港，嘉義，台南，安平，高雄，屏東，潮州，東港，パイワン族部落，台東，花蓮港，アミ族部落，羅東，宜蘭，タイヤル族部落などを訪ねた[5]。これは台湾原住民族と漢民族の代表的な民芸品を体系的に調査したものである。調査活動のなかで，柳は各地で数多くの民芸品を買い入れ，調査終了後に台北市の公会堂でこれらの展示会を催した。最終的には東京駒場の日本民芸館に収蔵された[6]。

１－２　台湾民芸紀行

台北地区で，柳は主に建築と民芸品を調査した。建築は板橋の「林本源邸」，淡水の「旧英国領事邸」の二棟を見学した。「林本源邸」は清国時代に建造された中国南方様式の豪邸で，柳は「とにかくえらい力だね。仮にこんな家にわれわれに住めと云はれても，とても住めないね。これを住みこなすのは大変な力だ。生活の中にこれだけの夢を現はすことはたいしたものだ[7]。」と語った言葉から，柳がこの建築物から現われる力強い美を賞賛していることが窺える。また，調査終了後の座談会の中で柳は「林本源邸」などの台湾伝統建築物を例にとり，伝統建築物保護の重要性や台湾における建築物保護の制度の必要性を強調した。次に西洋様式の建築物「旧英国領事邸」を見て，それのもつ美しさに感動し，「いい建物だ。これを貰って台湾の民芸館を作ればいいぢゃないか[8]。」と思わず口にした。

台北市菊元百貨店では，商品の黄牛（役用牛の一種）の角で出来たパイプを見て次のように言った。「この筒だけなら見所がある。西洋ではこれで出来たコップがあるが，光線が透って中の液体が実に美しく見える。台湾の陽が暑くて，飲物がほしい土地では，この材料を何とか生かすといいね[9]。」このように現地の産物を加工し製作した工芸品は，それ自体が有する機能と良質の材料が有する美感の他にさらにその地方独特の風格をもつ物を柳は賞賛した。

台北市近郊の鶯歌という陶器の里を訪問した際には，柳の台湾民芸についてのステレオタイプ的な認識が大きく変った。「従来，台湾には焼物（図２）は豊富でないと言ふ説であったが，

行ってみると見るべきものが沢山残されてゐたし，現在も活発に作られてゐるのである。例えば，台北の近くにある鶯歌の村など，全村をあげて焼物を作り全村民が陶工であると云ふ状態であった[10]。」

図2　陶器（筆者撮影，2004，台湾台北）

柳は台北地区を離れ，新竹，彰化へと南下した。彰化地区の孔子廟がある敷地は交通を妨害しているために取り壊し計画が立てられた。同年朝鮮京城（現ソウル）光化門の取り壊し計画について政府当局に強く計画の中止を要求したように，柳は彰化地方政府に対しても取り壊し計画の中止を要求した。「単に往来をまっすぐする為に，立派な建物を壊すなんて，そんなことをするのは実に馬鹿なんだね。もう二度と建たないものぢゃないか。こんなのは道の方で避ければいいんだ[11]。」この言葉からは歴史的建築物保存の重要性を唱える柳の堅い意志が見て取れ，それは以下の言葉にも現れている。「どうも孔子様みたいなかたにこんなことをするのは，それこそ風教上よくないね。もう一度建てようったって建たないんだからね[12]。」

このほか，柳は彰化で優れた竹細工を発見した。これは台湾での調査活動における初めての竹細工の発見であった。柳はなかんずく竹の蒸篭（図3）がもつ力強さを賞賛し，これを買い求め本土に持ち帰った。彰化で発見した竹細工について，柳は調査終了後に総督府文教局局長主催の座談会の席で得意気に買い入れた蒸篭を皆に披露した。このような行動は，柳が台湾民芸の中でも特に竹細工に対して深い印象を覚えたことを物語っている。

北回帰線を越えて熱帯に属する嘉義，台南，屏東などの南部は，充分な陽光と温暖な気候が竹や木，林投樹などを材質上優れたものに育てている。柳は南部地区を幅広く訪ね歩き，現地の発達した竹細工や織物，陶器や寺院などの建築物を調査した結果，とりわけ竹細工製品とその製作環境を大いに賛嘆し，道端に生える野生の竹林について，「性格があるね。まるで木のやうな感じだね。内地では見られない竹の美しさだ[13]。」と言った。柳は民芸運動の提唱と民芸理論の構築の際，常々理想の工芸村に言及している。彼は工芸村のような生産形態こそが最も望ましい工芸品を生み出すことができると考えていた。台湾南部の関廟という竹細工を主に産業

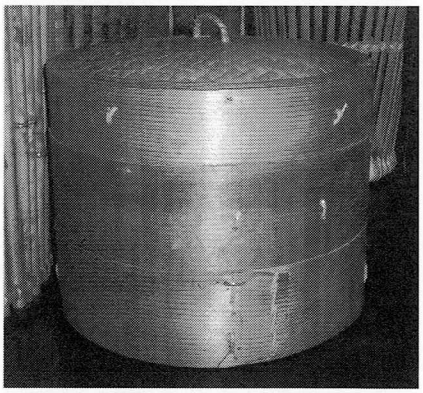
図3　蒸篭（筆者撮影，2004，台湾彰化）

とする村を訪ねたとき，彼は次のように言った。「ああ面白かった。こりゃこの村一つ見るだけで台湾にわざわざ来た値打があった。（中略）工芸村としては理想に近いものだ[14]。」この言葉からは，関廟村についての驚きと喜びが滲み出ている。このほか東港の民家を調査し，竹材で建てたものに興味を示した。「竹の家（図４）は民家としては世界一だね。この味ってものは他にないものだ[15]。」

図４　竹の家（筆者撮影，2006，台湾南投）

このように道中の柳の話題は竹材を使った工芸と建築に終始し，しかも竹が最も東洋的な色彩と美観を備えていると指摘した。工芸（図５）や建築の分野で竹の特質を発揮させることで，東洋的な美観を際立たせた作品を創造することができる。よって，竹は非常に理想的な工芸材料であるといえる[16]。

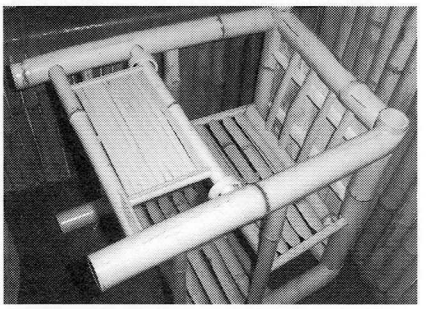

図５　竹細工（筆者撮影，2005，台湾台南）

漢民族の主な民芸を調査したのち，柳は潮州でパイワン族の織物を発見した。それから東に方向を転じ羅東のタイヤル族部落に到着した。先ず部落の生活環境について下記のように言った。「寒渓はタイヤルの特色がよく生かされてゐる。そして村や住居が清潔で衛生的に改善されてゐてなかなか立派だ[17]。」次にタイヤル族が製作した織物や染織について，以下のように言った。「衣服なども苧麻（カラムシ）を染めて手織りで作ってゐるが，非常にいいものが出来る。美しいものを作る本能がまだ残ってゐるんだね[18]。」羅東のタイヤル部落の調査を終えるとともに，全島の生活用具の調査活動も終わりを迎えた。柳一行は各地で収集した民芸品を台北に持ち帰り，４月13日に台北帝国大学において「民芸とは何か」をテーマとした講演を行なった。また，４月16日から17日まで調査報告展示会を開催し[19]，これをもって柳の台湾考察の旅が幕を閉じた。

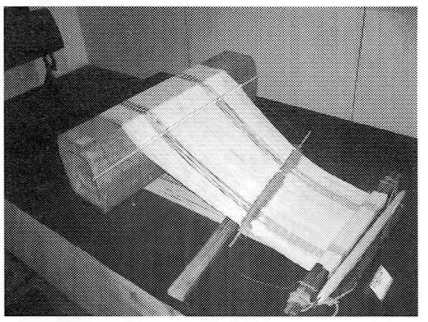

図６　織機（筆者撮影，2005，台湾台中）

2．美の発見

2－1漢民族の竹細工

前章でいくらか柳の台湾の竹細工における関心に触れたが，ここではこの部分をさらに詳らかにする。

台湾の竹は広範囲に分布し，特に中南部地区の竹の質が最も優れている。台湾における竹細工の発展過程を考察すると，その歴史は約350年前まで溯ることができる。大陸東南部沿岸地域の漢民族が海を越え台湾に移入したあと，竹材を利用して生活に必要な用具を作った。これが台湾竹細工産業の始まりである。清の雍正年間に入ると，商業交易により次第に精緻で高価な竹細工が大陸から台湾へと流入した。これに対して，台湾自体の竹細工産業は依然として生産を維持し，一般庶民の廉価な竹細工への需要を満たした。以上の状況は，現在僅かに残っている文献資料から理解することができる。しかし，このほか当時作られた製品の品質や生産状態など多岐にわたる記録はほとんど見られない。竹細工産業について比較的詳細な記録を目にすることができるのは，日本統治時代のものである。台湾総督府殖産局が1913年（大正２）に行った調査によると，竹細工は台湾の重要な手工芸であり，竹細工の従事者は島内に遍く見られ生産量も非常に豊かであるが，ただ品質が劣っており，これが唯一残念な点であると殖産局が指摘している。しかし，台湾はもともと天然の優れた質の竹を有しているため，製品の設計や製作面での指導を加えれば，将来竹細工（図７）が価値を生む一大産業になっていくとも述べている[20]。

図７　竹細工（筆者撮影2005，倉敷）

以上の調査報告が出たちょうど30年後，柳は台湾を訪れた。非常に興味深いのは，柳が見た台湾の竹細工は，生産状況や品質の面において30年前に殖産局が指摘した状態からは相当の差異があった。特に関廟村の生産状態について以下のように語った。「竹細工では殊に台南州関廟のに打たれました。組織といい，仕事場といい，その仕事振りやその製品，（中略）恐らく世界の何処を探しても滅多にあるものではなく，工芸の村として吾々が頭で考えている一つの理想に近いものが，この世に実在しているような感がして実に驚嘆しました[21]。」柳は理想的な工芸生産システムに言及するときは，非個人が生産する工芸品こそが民芸の精神に合致し，また，集団組織からのみ正しい民芸品が生まれると述べた[22]。関廟村で彼は自分の考える理想に近いものを目にした。関廟は台湾南部地区における一つの竹細工生産村で，この地区の住民は漢民族が大半を占め，漢民族の伝統的な大家族の生活形態を自然に形成していた。大家族は日常の生活あるいは労働の場においても，集団で行動する集団文化を構成し，なかでも工

芸の場において高度な集団労働の形態を具えていた。これが柳のいう理想に非常に近い生産形態であった。

竹細工について，柳は次のように語っている。「竹細工は是非生かすといいな。材料だってあるし，内地にはない技術なんだからね。あんな技術ってものは世界中どこへいったってありゃしないよ[23]。」柳が見た台湾竹細工は優良な性質をもち，30年前の殖産局による評価とは両極化している。柳は台湾竹細工は非常に優れた民芸品であることを強調し，ならびにドイツの建築家ブルーノ・タウトも台湾の竹製の椅子が放つ美しさに深く感動し，東洋の特質をもった素晴らしい民芸品であると認めていたと語った[24]。台湾竹細工（図８）に対する柳らの評価と30年前に殖産局が下した評価との落差は，一つには柳と殖産局の美意識の基準が違っていたこと，二つには殖産局が30年間という短い時間のうちに竹細工の欠点を徹底的に改善したことで，柳が見た竹細工は30年前のそれとは明らかに別物になっていたことが考えられる。

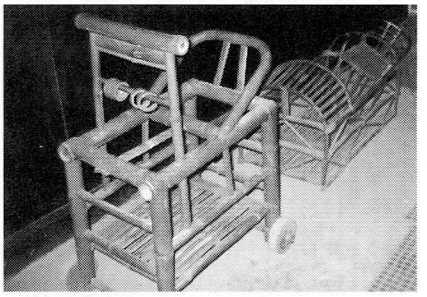

図８　竹細工（筆者撮影，2005，台湾台南）

２－２　高砂族（原住民族）の織物

台湾の原住民族には，各々の民族文化や生活形態，経済状況によって様々な織物文化が存在する。原住民社会において，織物製作は女性必須の技術で，男性は狩猟技術が必要である。台湾原住民族の織物工芸（図９）は，タイヤル族とサイシャット族が最もこの技術に長じている。当時多くの人々は「未開の蕃人」であるとの蔑視感を原住民族に対して抱いていたが，柳は彼らとは違い自ら進んで山深い奥地に分け入り，自分の眼で原住民族の芸術に触れた。「高砂族の織った織物を，美しいと見る人は多い併しそれを産んでくれた人々に驚きを感じる人が稀なのは不思議である。彼等を未開人と軽蔑してゐる人は，その布の美しさを知ってゐる人とは思へない。ましてあんな原始人にどうしてこんな美しい布が織れるのかと考へる如きは僭越の至りである[25]。」と彼は語ったと言う。柳は原住民族に尊敬の念をもち，また世間の人々も次第に柳の跡を追い原住民族とその芸術文化に注目するようになった。

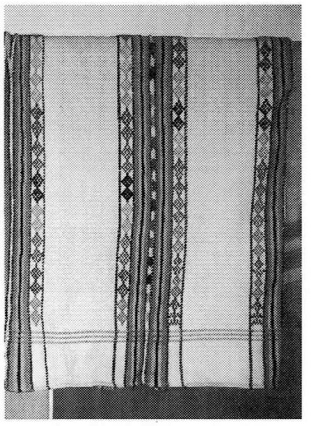

図９　原住民族の織物
（筆者撮影，2005，台湾南投）

3．地方性と東アジアの造形文化

3－1　東アジアの造形文化と台湾民芸の美

柳は民芸理論を提起するにあたり，日本本土以外の地域の民芸をも注視し，過去に彼に啓蒙をもたらした朝鮮民芸や琉球民芸，台湾民芸，支那民芸の全てに関心をもっていた。彼は東アジア地域における文化と芸術造形は密接に結びついていると認識していた。柳はそれらが相互に交流と対話を行うことで正しい美を確立することができると考えた。このような考えは今日においても依然として重要視されている。柳は東アジア造形文化において，出発点および考察の重心を日本本土に置いていた。それに対し異を唱える者は，それは政府が提唱した大東亜共栄圏に迎合したものにすぎないと批判した。しかし，柳の台湾視察は，台湾民芸の発掘を通して本土に欠けている部分を発見することにつながった。また台湾民芸を考察するだけではなく，本土の優れている点をもって補充するように提言した。

陶器を例にとると，「陶器は時局の進展と共にますます島内で自給すべき必要が濃くなって来ることと思いますが，内地のものを取り入れようという考えは間違いである。とても内地のかなわない面がある。折角内地にもない東洋の力を保存しているものを，今の弱々しい内地品で弱めるということは，実は馬鹿な話です。こちらの形，こちらの手法を生かして，こちら独特の方法で将来進んでゆかれることを希望します。これが将来の日本工芸の力を強める一つの原動力ともならなければならないと考えるのであります[26]。」柳は台湾の陶器がもつ美しさを発見することにより，本土の文化状態を再認識した。力強さを放つ台湾の民芸品が，日増しに薄弱になる日本文化を改善させることができると考えた。さらに，当時内地政府が工芸指導員を台湾に派遣する際に，指導員が内地の見方で現地の民芸産業を指導することに対し，彼は異なる意見を提出した。彼が考える理想的な工芸の指導方法は，先ず各地における民芸産業の表現の幅を尊重し，そのあとに適切な美的判断力をもつ者がそれぞれの民芸産業を客観的に判断するということである。「今もいう通り，内地の工芸は既に弱々しくなり，堕落しつつあるのですから，内地を見本としてはいけない。この土地の伝統を尊敬して，正しい意味でこれを生かしてゆかなければいけない[27]。」一方，美の判断能力については以下のように指摘した。「ただ日本人はもののいい悪いを見わけることにかけては，世界でも第一流の眼をもっている。だから指導者としては日本人が介在した方が無難である[28]。」この言葉は，柳の美の判断と地方の特色に対する許容範囲についての基準と限界を示している。すなわち地方の特色を尊重しながら，美の判断においては適切な判断能力が必須であり，これらを併せ持って初めて適切な美が創造されるということである。柳は内地の工芸指導員が日本中心主義の審美感でもって台湾工芸に関与するべきではないと反対した。しかし，前述の引用文のように日本人が世界でも第一流の眼をもっているという柳の考えこそが，彼自身の批判する日本中心主義なのではないだ

ろうか。

3－2　地方性と時代について

柳の訪台時は，正に戦争真っ最中の時期であった。日本政府は国の力を戦争に注ぎながら，産業分野の政策においては日本内地の技術の保護に努め，全体の国力を強めようとした。また非常時の台湾総督府は皇民化運動を推進し，宗教や文化，言語などの領域で行き過ぎた地方色を取り除くことを試み，戦時中の人々の国家意識と力を凝集させた。柳は，工芸産業の奨励を抑えることで非常時の物資の浪費を減少させるという政策は全くの間違いだとの見解を出した。彼は，地方民芸[29]を奨励しつつ各地方の資源を活用し，民芸精神を基礎とした簡素で安価，その上正しい美しさを有する生活必需品を生産するべきだと主張した。これらの必需品が人々の生活の中に入り込むことで，人々は不自然な造形と浪費の風潮を是正することができるとした。したがって地方民芸の奨励は各地の貴重な伝統技術を留めることにつながり，「将来の日本工芸の力を強める一つの原動力ともならなければならない[30]」と考えられた。柳は台湾の地方性の問題について以下のように語った。「だから台湾を一地方と考へて，地方性を発揮すれば良いと思ひますね。矢張り東北だって東北と云ふ一つの地方性を維持してやって行かうと云ふのでありまして，同様に台湾も一つの地方として有機的な繋がりの中に結びつけて行けばよろしいでせうね[31]。」

台湾の民芸について，柳は過度の配慮は必要なく逆に積極的に民芸を発展させるべきだと考え，また台湾民芸の東アジア造形文化における重要性をも説いた。以上の提案は間接的に当時の総督府当局と民間の有志を発奮させることになった。柳が台湾での調査を終えて間もなく総督府をはじめとする人々が生活文化振興会を創立し，展覧会や講演会などの活動を通して台湾造形文化運動を推し進めた[32]。この活動は台湾各地で大きな反響を呼んだ。ほどなくして台湾工芸協会が誕生した。

おわりに

1943年（昭和18）に実施された台湾における調査活動の結果は，柳にとって台湾民芸について理解するだけでなく，当時民芸が非常時に直面していたことから生まれた新たな課題をも認識することになった。台北での座談会が始まると，柳はタイヤル族の織物を手に持ち，「この眼で台湾を見まして，本島のものに非常に尊敬すべきものが多いと云ふことが判って大変愉快に思ってゐる[33]。」と楽しげに語った。柳は調査の過程で，関廟村の竹細工やタイヤル族の織物，力強さが滲み出た陶器や木製品がもつ台湾民芸の美しさを発見し，それらの中に彼の理想に近い民芸美を見た。この旅は彼の民芸理論の正当性を確認する旅ともなった。

それでは，柳は台湾に対して何をもたらしたのだろうか。いくつかの着目点に分けて述べる。先ず，最も重要なのは台湾民芸の発見である。台湾において工芸活動が出現したのは，およそ数千年前の原住民族に溯ることができるが，審美的な見方を用いて工芸品を取り扱うようになったのは柳の出現が契機となっている。当時の日本民芸館館長であり，民芸運動の権威的指導者でもある柳宗悦の台湾民芸に対する発言と賞賛は，台湾の行政指導者にも一般の人々にも改めて自分の身のまわりにある工芸品を再認識させた。同時に台湾の民芸は柳の口を通じて東京，大阪で披露された。

柳は台湾の民芸の発見以外に，各種の工芸産業と造形文化の振興方法や伝統建築物の資料登録，建築物保護の法整備を提案した。台湾工芸発展について今日までの重要な事柄を顧みると，日本統治時代に存在した「台湾造形文化運動」，「台湾工芸協会」などのような工芸振興活動は，近年においては60年の中断の時を経て2005年から台湾政府行政院文化建設委員会の推進により「台湾生活工芸運動」という名で復活している。ここでは柳の事績についての展覧会や講演会が開催されており，彼が残した理念を学ぶことが試みられている[34]。台湾工芸史における柳宗悦の役割は再考されるべき時にきているのではないだろうか。

本稿は2005年11月13日の第47回意匠学会大会における口頭発表「柳宗悦が見た台湾民芸」をもとに加筆してまとめたものである。

註

1　柳宗悦が台湾に対して関心を持ち始めたのは1902年（明治35），彼が学習院中等学科１学年に在籍していた年である。日清戦争勝利を経て，清国から割譲され新しく得た領土台湾について，彼は回覧雑誌『文の林』第二号において「海国男子の本領」という文を発表した。このなかで「夫れ何者か能く宇内万邦に勝り，世界列国に誇るべきぞ，曰く凛々たる大和魂是なり。（中略）近くは日清の開戦，我国連戦戦勝の結果，遂に清国をして和議を請はしめ，南方の一大台湾を割取し，歴史，地理に特筆すべき，版図を広めたる如き，皆凛々たる大和魂を発揮したるものなり。」と，当時の心のうちを表した。また，初めて台湾民芸に注目したのは1914年（大正３）に開催された大正博覧会においてである。博覧会出品の台湾原住民族の民芸を高く評価し「此春東京の博覧会に出品されたものゝ中，最高の芸術的賞賛を受けるべきものは今の文明が産み得た美術品，工芸品ではない，かの台湾と南洋との土人が製作した布である，土器である。武器である。」との感想を残している。

2　江韶瑩「論新民藝：従三位民藝運動者的歴史回顧，展望台湾民藝的未来」2004，『威廉・莫里斯與工藝美術』時藝多媒體出版

3　末成道男編『池田敏雄台湾民俗著作集下巻』緑蔭書房，2003，p. 445。日台間の往復時間を除くと，柳が実際に台湾に滞在したのは３月14日から４月17日までである。訪台の行程を終え，柳の一行が乗っ

た船は4月20日に無事神戸に帰港した。

4 柳宗悦「台湾の生活用具について」『全集第十五巻』筑摩書房，1981，p. 614

5 柳宗悦「年譜」『全集第二十二巻下』筑摩書房，1992，p. 273

6 末成道男編，前掲書，2003，p. 521

7 柳宗悦「台湾の民芸について」『柳宗悦民芸紀行』岩波書店，1986，p. 264

8 柳宗悦，前掲書，1986　p. 264

9 柳宗悦，前掲書，1986　p. 264

10 柳宗悦，前掲書，1981，p. 617

11 柳宗悦，前掲書，1986，p. 267-268

12 柳宗悦，前掲書，1986，p. 267-268

13 柳宗悦，前掲書，1986，p. 277

14 柳宗悦，前掲書，1986，p. 276

15 柳宗悦，前掲書，1986，p. 286

16 Kikuchi Yuko 2004 Japanese Modernization And Mingei Theory. London; RoutledgeCurzon. p. 169-170

17 柳宗悦，前掲書，1986，p. 288

18 柳宗悦，前掲書，1986，p. 288

19 4月16，17日の二日間，柳は台湾で収集した約90件の民芸品を台北公会堂にて展示会を催し，この収穫について講演した。

20 台湾総督府殖産局「台湾の工藝6」『神戸又新日報』，1913年1月23日

21 柳宗悦「台湾の民芸を語る」『民藝』148号，1965，p. 14

22 柳宗悦など「生活と民芸座談会」『台湾公論』1944年6月，p. 67

23 柳宗悦，前掲書，1986，p. 279

24 柳宗悦，前掲書，148号，1965，p. 15

25 柳宗悦「台湾の民芸」『民藝』148号，1965，p. 4

26 柳宗悦，前掲書，1986，p. 283

27 柳宗悦，前掲書，1986，p. 285

28 柳宗悦，前掲書，1986，p. 285

29 笹原亮二「用と美」『柳宗悦と民藝運動』2005，p. 287-290

30 柳宗悦，前掲書，1986，p. 283

31 柳宗悦など，前掲書，1944年6月，p. 65

32 商工省工芸指導所「台湾の造形文化運動」『工芸ニュース』第12巻5号，p. 184-185

33 柳宗悦，前掲書，1981，p. 610

34 国立台湾工芸研究所「2005年台湾生活工芸運動元年予告」『台湾工芸』19期，p. 73-75